

東北応援ツアー(宮城県コース)に参加して思うこと

木村 篤史 (1985・産社)

被災地には、至る所にセイタカアワダチソウが繁茂していた。津波によって人家も多くの植物も流失し空地が増えた。他の植物が塩害によって阻害されても、この植物は生命力が強く生えることが出来る。例え違う植物が生えていても、割り込んで来て勢力拡大を図るため、そのほかの植物は、最早成長出来ない。

即ち、津波について考察をすると、幾多のかけがえのない人命、建物、まちを奪いつくすだけで無く、植生、生態系にも重大な影響を及ぼしつつ有るのではないかと、ツアーバスの最後尾の席で、わたくしは、ひとり思索に耽っていた。

今回、倉願叶って、東北応援ツアーに参加する事が出来たが、心中穏やかならざるものが有った。それは、これからお伺いする、石巻・女川・(荒浜)・閑上の復興が或る程度進んでいて、被災された住民の方々が、将来に希望を持って生活をされている姿を見る事が出来れば良いのであるが、そうではない場合は、どう接したら良いのかであった。

結果として、わたくしの懸念は無用に終わった。宮城県で拝眉することが出来た、石巻の木村校友のご舎弟、女川の語り部の女性、閑上の佐々木校友ご夫妻とも、往時を語る際には涙されてはいたものの、大震災から3年7箇月を経て、皆様におかれては、中小企業庁からの特例助成を受けての事業再開・零からの新しいまちづくり・古来の製法から学んだ商品づくりなど、明日への希望を持って人生を送っていらっしゃる姿に、只々頭こぶが下がる思いであった。

結びに、復興は時間との競争であり、彼の地の槌音が更に加速することを願って、筆を擱く。

この場をお借りし、宮城県校友会ならびに大学校友会事務局担当の皆様、改めて御礼申し上げます。